

# アウグスティヌスのストア的術語の用法について

## — 『告白』 11 卷 23 章における *communes notitiae* の語を巡って —

山田 庄太郎

### 1 目的

本稿の目的は、アウグスティヌス (354-430) の著作『告白』 (ca. 400) 11 卷 23 章における「共通観念 *communes notitiae*」の語の分析を通じ、アウグスティヌスとストア哲学との関係性の一端を明らかにすることにある。

アウグスティヌスが、古代末期の哲学的潮流の一つであるストア派についての一定の知見を有していたことは良く知られており、彼の思想に対するストア派の影響についても、しばしば言及が為されてきた<sup>1</sup>。特にオダリーは『告白』 11 卷の時間論とストア派の時間論の類似性を指摘し、直接の影響関係については言及を控えているものの、アウグスティヌスの議論が先行する哲学的な諸議論の内に位置づけられることを明らかにした上で、その中で彼の独創性を論じている<sup>2</sup>。その一方で、およそあらゆるものは存在する限りにおいて物体である、というストア派の有名な公理は、アウグスティヌスの哲学的な立場からは大きく異なるものであるように思われる<sup>3</sup>。

肯定的なものにせよ否定的なものにせよ、ストア派からの影響を考える際に問題となるのが、彼が一体どの程度その教説に通じていたかという点であろう。そしてストア派の資料の不足がさらにこの問題を困難なものにしている。

そこで本稿では『告白』 11 卷 23 章見られる「共通観念」という用語に着目した。この用語に関しては、以下で紹介する様に、『告白』の優れた研究者であるソリニャックとオドンネルがそれぞれ註をつけており、その用語がストア哲学に由来すると共に、既にテルトゥリアヌス (ca. 160-ca. 220) の内にその受容が見られると指摘されているからである。

周知の様に、アウグスティヌスと同様に属州アフリカで活躍したキリスト教徒テルトゥリアヌスは、ストア哲学を含むギリシア哲学によく通じており、また後にはモンタヌス派へと走ったものの、ラテン語神学用語の確立に大きな貢献を果たした。属州アフリカ教会のこの偉大な先人の名をアウグスティヌスはしばしば取り上げている。しかしまた彼のテルトゥリアヌスに対する評価はしばしば否定的なものであって<sup>4</sup>、果たしてある概念を純粋に受容しえたかについては疑問が残る。

従って以下、ストア哲学<sup>5</sup>に由来する「共通観念」の語を軸として、その語のアウグスティヌスとテルトゥリアヌスの用法を、初期ストア派のテキストにまで遡りながら比較検討し、前二者の間の影響関係について考察を加えると共に、アウグスティヌス

のストア哲学受容を考える一助としたい。

## 2 アウグスティヌスの用例 —— 『告白』 11 卷 23 章 29 節

アウグスティヌスは『告白』 11 卷 14 章で「それでは時間とは何か」という問いを發し、以下我々がいかにして時間を計測するかを 28 章にかけて探求する<sup>6</sup>。問題の「共通観念」の語が登場するのはこうした文脈においてである。

時間の計測に関する一連の議論の中、『告白』 11 卷 23 章 29 節でアウグスティヌスはある「学者」の説を取り上げる<sup>7</sup>。この「学者」の主張は「日月の、そしてまた星の動が時間それ自体である」というものである。それに対しアウグスティヌスは、「何故むしろ全ての物体の動が時間ではないのか」あるいはまた「仮に天の諸々の光が止まり陶工のろくろが動いているとしたならば、時間は存在しないというのだろうか」との疑義を唱え、さらに、我々の語る言葉を構成する音節の長短がその音節の鳴り響く長さによって決定されているが故に、このような疑義を唱える言葉もまた「時間の内で」語られていると異議を提出する<sup>8</sup>。

これらの異議を提出した後、彼は次の様に続ける。

神よ、小さきものの中に小さきものと大なるものとの共通観念 *communes notitias rerum paruarum atque magnarum* を見ることを人間に許し給え。天の星々や光体は、時節や日や年に関する諸々のしるしに関わるものである。確かにそのようなのである。然るに、私はかの木で出来たろくろの回転が一日であるとは言わないであろうし、他面、この[同じ]理由から彼[ある学者]はろくろが時間ではないとは言えないであろう。(Aug., *Conf.*, 11, 23, 29)

ここに我々の目下の目的である「共通観念」の語が登場する。アウグスティヌスにとり天球の動は確かに、日や年に関するしるしに関わるものである。丁度太陽の通常の日周運動が「一日」と呼ばれるように<sup>9</sup>。しかしまたこの一日は、太陽が停止した間にも同じように過ぎ去っていくことだろう。実際、アウグスティヌスは続く 23 章 30 節において、『ヨシュア記』 10 章 12-13 節の記述を典拠とし、「日はまる一日、中天にとどまり、急いで傾こうとはしなかった」(Josh. 10:13) 時にも民が敵を打ち破るまで戦いが続いたのであるから、たとえ天球が静止していたとしても動が生じうると主張する<sup>10</sup>。

今や時間は天球の動の間ではなく、さらには何らかの動の間であるのでもない。実際アウグスティヌスに従えば、言葉を構成する諸音節は物体であり、言葉自体もまた物体であって<sup>11</sup>、あらゆる物体の動は確かに時間の何らかの尺度ではあるが、同時に時間の内に在るとされる<sup>12</sup>。従って、それら物体の静止をも我々は「時間によって計測する」のであり、ここからまた「時間は物体の動」ではないという結論が導き出される<sup>13</sup>。

我々の目下の目的である「共通観念」の語が用いられるのは、こうした物体の動と時間との関係を巡る議論の中においてである。それでは、実際にアウグスティヌスに

において、この語は一体どのような意義を有しているのだろうか。

上述の引用箇所に関してソリニャックは、「共通観念 *communes notitiae*」の語がストア論理学に遡る用語（ギリシア語 *κοινὰ ἐννοιαί*）であると指摘しており<sup>14</sup>、そうしたヘレニスティックな思想的潮流をも内包するような観点からのアプローチの必要性を示唆している。これを受けてオドンネルは、ヴァスツィンクの研究を基に、テルトゥリアヌスの内にこの同じ概念が既に見出されると述べ<sup>15</sup>、そこからの影響を想定しているようである。

### 3 テルトゥリアヌスの用例

それではオドンネルやヴァスツィンクの指摘する、テルトゥリアヌスにおける「共通観念」の用法はどのようなものであるのだろうか。ヴァスツィンクはテルトゥリアヌスの著作『魂について *De anima*』（ca.208-ca.211）の注釈の中で、彼のその他の著作を引用しながら、ストア派の「共通観念」という概念が彼の思想に与えた影響について簡潔に論じている<sup>16</sup>。ここではヴァスツィンクの指摘を参考に、『魂について』と『死者の復活について』から二つの証言を取り上げたい。

テルトゥリアヌスは『魂について *De anima*』第41章で、原罪によって傷つけられた人間の魂の内に、なお何らかの善が残されていることについて論じる。

彼によれば、この善は神に由来し、悪によって抑えつけられることで、「失われたのではなく、暗くされている」のであるが、それは丁度何らかの障害物によって遮られた光のようである。しかしまたそれは神に由来する限りにおいて、決して無にされることはないのであり<sup>17</sup>、従って「最も悪しき人々の内にも悪に属する何ものかが存在し、最も善き人々の内にも悪に属する何ものかが存在する」と言われる<sup>18</sup>。

そしてこのように我々人間の内に残された善の証拠を、テルトゥリアヌスは次の事柄の内に見出そうとする。

従って諸々の予知 *praesagia* の内へと魂の神聖さが先立つ善から現れてくるのであり、神についての知識が証言の内に現れている：即ち「善なる神」とか「神は見ている」とか「神に委ねる」といった我々の証言の内に。（Ter., *De anima*, 41, 3）

ここに明らかなように、彼は諸々の予知・予見 *praesagia* という行為の内に、魂に固有の神に由来する善を見て取る。そしてその表れとして「善なる神」や「神は（これこれを）見ている」、「神に委ねる」という我々の日常の内に見られる用語法を挙げるのである。即ち、テルトゥリアヌスに従うのならば、「神に委ねる」といった我々の言葉それ自体が、我々がその魂に固有の善によって、何らかの仕方では限定的にはあるが神的な事柄を知っていることのしるしとして理解される。

これに関する『死者の復活について』の次の記述は、より明瞭なものである。

確かに、神に関する諸々の事柄を共通観念 *communes sensus* から知ることもある……実際、あるものは自然的に知られる。たとえば魂の不死性[についての知識]

は多くの人々が有しているし、我々の神[についての知識]は全ての人々が有している。それ故、「全ての魂は不死である」と主張するプラトンの見解を私は用いることにしよう。また神々の中の神を証言する人々の良心をも私は用いることにしよう。そして「神は見ています」とか「神に委ねる」と、裁き手である神を告げるところの、残る共通観念をも私は用いることにしよう。(Ter., *De resurr.*, 3, 1-2)

ここではさらに、神的な事柄の自然的な知の根底に「共通観念<sup>19</sup>」の働きが措定されている。先の引用箇所では「神に委ねる」といった我々の発話行為が、魂に固有の善を指し示すものであるとされた。そしてまたそのような発話行為の内には、たとえ限定的であっても、人間における神に対する自然的な知の存在が前提とされている。従って「共通観念」とは、そうした発話行為を可能ならしめるものとして、それら神に対する知を自然的・本性的に人間の内に形成せしめるものであると、ひとまず言うことが出来よう。

ヴァスツィンクはこれらの引用箇所を基に、テルトゥリアヌスの内に「先験的でありそれ自体は疑われることのない共通観念によって得られる、神についての自然的な知という概念」が見出されるとしている。その上で彼はまた、こうした概念が起源としてはストア派に遡ることを指摘、ラテン語“*communes sensus*”がストア派の“*κοινὰ ἔννοιαι*”に対応するものであると述べる<sup>20</sup>。

従って我々は次の節でストア派の共通観念に関するいくつかの証言を概観し、その後テルトゥリアヌスの「共通観念」の用法について改めて振り返ることにしたい。

#### 4 ストア派の用例

ストア派の思想について触れる上で最大の問題である資料面の問題に関しては、J. ブランの次の指摘が最も正鵠を射たものであろう。即ち「ストア哲学のごく明瞭な点にはテキストが豊富であるのに、不明瞭な点については乏しく、あるテキストは相互に矛盾し、またあるものはひどく損なわれている」のである<sup>21</sup>。幸いにして我々の関心事である共通観念については、いくつかの証言が残されている。これらの証言はひとまとまりの体系的なものではなく、時に曖昧さも残るが、それでもなお一定の理解を得ることが可能である。

テルトゥリアヌスの用法に関連して最も重要と思われるのは、セクストス・エンペイリコスが伝える次の断片である。セクストスは自身の立つ懐疑主義の立場から、ストア派の次のような教説を取り上げている。

[ストア派の人々によれば]それらに加え、神が在るのならば原因がある。というのも、神は本来、世界全体を統治するものであるから。然るに人間達の共通観念によれば *κατὰ τὰς κοινὰς ἐννοιὰς*, 神が在る。それ故、原因が在る。(Sextus, *Adv. math.*, 9, 199 = *SVF*, 337)

この引用からはストア派の人々が、人間は共通観念によって神が存在することを知り

うると看做していたことが窺える。このことはさらに、セクストスの次の一節からも明らかである。

さらにまた、神々が存在しないならば義は神々との関係における一種の正義であるので、非存在である。然るに、あらゆる人々の共通観念と先取観念に従えば κατά τὰς κοινὰς ἐννοίας καὶ προλήψεις 義は存在し、何かが義であるのもそれに基づいてである。それ故、神的なものも存在することになる。(Sextus, *Adv. math.*, 9, 124 = *SVF*, 1017)

しかしこの一節からは、もう一つ別の事柄が知られる。即ち、共通観念は必ずしも神についての知識にのみ関わるものではなく、義についての知をも提供する。

実際ストア派にとって共通観念はただ神にのみ関わるものではない。アリストテレスの著名な注釈者の一人であるアプロディシアスのアレクサンドロス (fl. 2-3 c.) が、ストア派の混合に関する教説について伝える、クリュシッポス (ca. 280-207 BC) の次の主張は重要である。

彼[クリュシッポス]は混合にそれらの種類があるということを通観念を通じて διὰ τῶν κοινῶν ἐννοιῶν 確証しようと試みて、われわれは共通観念をとりわけ真理の判断基準 κριτήρια τῆς ἀληθείας として自然から得ていると主張する。(Alexander Aphrod., *De mixtione*, 216-218 = *SVF*, 2, 473)

ここで共通観念は、クリュシッポスによって「真理の判断基準」として立てられている。こうした思想を理解する為にはストア派の倫理思想への言及を欠くことは出来ないが、しかしこの問題に関する考察は次節に譲ることとし、ここでは最後に次の証言を取りあげることにしたい。

ストア派の人々の語るところによると、人間は生まれたとき、魂の主導的部分をいわば書き込みのためによく整えられた白紙として所有しており、個々の観念を ἐννοίας 自らひとつひとつここに書き込むのだという。……ところで観念の内のあるものは、先に述べられた仕方、自然本性的に、非人為的に生まれるが、別の観念は、われわれの教練と学問的営みとによってまさにそのときに生まれる。したがって、後者はただ観念とのみ呼ばれるが、前者はまた先取観念 προλήψεις と呼ばれる。さて、われわれはロゴスを有することによって「ロゴス的なもの」と名づけられるが、このロゴスがさまざまな先取観念に満たされるのは、最初の7年においてであるといわれる。(Aetius, *Plac.* 6, 11 = *SVF*, 2, 83.)

アエティオスの伝えるこの一節は、観念に関するストア派の教説の重要な点を伝えている。即ち、ストア派の教説によれば、観念は、それが獲得される過程によって、先取観念とそれ以外という二つの種類に分かたれる。

生得的 ἐμφυτοί と呼ばれるこの先取観念は<sup>22</sup>、人間の魂が白紙の状態として整えら

れている限りにおいて、純粹に生得的なものであるのではない。しかしまた他の諸観念のように、「教練 διδασκαλία」や「学問的営み ἐπιμέλεια」という我々の人為的な行為の結果として獲得されるものでもない。むしろ非人為的なものであり、我々の自然本性に従って生み出される限りにおいて<sup>23</sup>、先取観念は全ての人間に普遍的に備わっているものである。それ故、アエティオスのこの証言に従うのならば、我々が問題にしてきた共通観念とはこの先取観念のことであり、我々のロゴスは種々の先取観念によって7歳（別のテキストによると14歳<sup>24</sup>）迄に満たされることになる。

## 5 ストア派における意義

ストア派において共通観念（ないし先取観念）がいかなる意義を有していたかは、その倫理学上の機能を考察することなしに語る事の出来ない問題である。従ってここでは、ゴルトシュミットとロングというストア派研究の碩学に頼りながら、少しくこの問題を掘り下げてみたい。

ロングが指摘しているように、ストア派の人々は「自然と共に、あるいは自然に従って、生きること」が人間の目的であると説いてきた<sup>25</sup>。自然 φύσις に従って生きるとは、ロゴス的なものと呼ばれる我々人間にあっては特に、ロゴスに従って生きることでもある<sup>26</sup>。「健全なロゴスによって生きるとは、論理的には人間の自然本性に従って生きることと等価」であり、人間の自然本性 φύσις が宇宙論的な意味での自然 φύσις の一部である以上、自己の自然本性に従って生きることが宇宙論的な自然に従って生きることを意味する、とロングは言う<sup>27</sup>。なぜならストア派にとって「諸々の行為はその行為者のロゴスが自然に則しているか否かに則して善く、ないしは悪く在る」からである<sup>28</sup>。

ところで、人間以外の動物は、欲求と忌避とによって適切に自己保存へと基礎付けられている。なぜならそれら動物は感覚する存在として、本性的にそのように在るからである。一方でまた、人間がそれによって特徴づけられるところのロゴスは、最初から十全な状態に在るのではなく、発達論的な発展過程の内に置かれている。実際、先に見たように、ロゴスは7歳（ないし14歳）に至るまで先取観念を獲得していく。人間が「ロゴス的なもの」と呼ばれる為にはこうした発展の過程を経る必要があるのである。

人間はロゴスによって自然に従って生きると言う時、このロゴスが「様々な先取観念によって満たされる」という事態は、即ち、先取観念という概念装置がストア派の人間論、特にその倫理学と密接に結びついていることを示している。ゴルトシュミットの次の分析が、この点を良く明らかにしていると言えるだろう。

ゴルトシュミットによれば、我々が自然に従って生きる知者たり得るのは、これら先取観念が我々に潜在的な可能性として「与えられている」からに他ならない。ストア派にとって先取観念は、神々や摂理の存在についての観念や善悪の観念を内包する非常に包括的なものであり「道徳と自然学の全体」を内包する。しかしまたこの包括的な総体としての先取観念は、実際の行為の場面へと潜在的な状態から人為的に現実化されねばならない。即ち、丁度ヒポクラテスの技術が「まさに健全と不健全のイデ

一こそを」展開することに存するように、個々のケースに相応しく適合させられる必要があるのである。それ故、先取観念は何よりもまず、定義によって説明され、展開される必要がある<sup>29</sup>。このような定義という過程を経て、詳細かつ差異化された諸観念へと分析されることによって先取観念は説明され得る「知識」となる。しかしまた、この定義づけられた諸観念は一つの体系へと組織化される必要を有する。なぜならば諸観念は孤立したものであるのではなく、善悪の先取観念の内に特定の道徳的諸観念が包含されていたことから理解されるように、本質的に相互に関係付けられ秩序付けられるべきものであるからである。このような「定義」と「組織化」という二つの「理論的準備」の段階を経て、我々は先取観念を特定のケースへと適用することが可能になるのであり、従ってまた具体的な行為において適切な行動を採ることが可能になるのである<sup>30</sup>。

先取観念が自然的に我々に与えられているが故に、そしてまた我々がそれを特定の場面へと適用することが可能であるが故に、ロングの言う様に、ストア派にとって「諸々の行為はその行為者のロゴスが自然に則しているか否かに則して善く、ないしは悪く在る」という命題が成立する。従って先取観念はストア派の倫理にとっての論理的基盤であり、先に引用した、クリュシッポスが共通観念を真理の基準として挙げたという証言は、かかる事態を示すものとして理解出来よう。

以上の論述から我々は、ストア派における共通観念（ないし先取観念）の特徴を次のようにまとめることが出来るように思われる。即ち、ストア派において共通観念は、まず(1)非人為的に、即ち自然的に形成されるものであり、(2)神々の存在と撰理の存在、ならびに様々な善悪の下位の諸観念を含み持つ。(3)それはある一定の年齢までにロゴスを満たし、(4)それ故に我々は個々の場面における善悪の判断を行ない得るが、(5)その為には人為的な「理論的準備」の段階が要請される。

こうした共通観念は、ストア哲学の体系内に切り離し難いほどに密接に組み込まれている。共通観念という概念装置は、この観念が自然本性的に人間のロゴスを満たす限りにおいて、人間のロゴスと宇宙論的自然とを結びつける。しかし一方でまた、この共通観念という概念装置が有効であり得る為には、次の二つの独立した前提が必要であるように思われる。即ち、(a)人間の自然本性が宇宙論的自然の部分であり、それ故に両者の間には本質的に調和を見出し得るということ、そしてまた(b)人間のロゴスが自己の自然本性に一致して働き得ること、以上の二つの前提が求められるのである。

## 6 テルトゥリアヌスにおける意義

以上、ストア派における共通観念の持つ含意を考慮に入れた上で、我々は先に挙げたテルトゥリアヌスとアウグスティヌスの用例についてそれぞれどのように言えるだろうか。

まず、テルトゥリアヌスの「共通観念 *communes sensus*」という用語は、ある程度ストア派のその用法と結びついているように思われる。ヴァスツィンクの指摘するように、テルトゥリアヌスの共通観念は、(1)人為的な行為の結果ではない「先験的」なものであり、かつまた、ストア派のそれに対し単数形へと変えられているが、(2)神の存

在を知らせる。

既に見たように、テルトゥリアヌスの『魂について』では、「暗くされ」た魂の内になお残された善を論じようと、この共通観念が用いられる。ヴァスツィンクの言う様に、テルトゥリアヌスにとって、ストア派の言う共通観念という概念装置は、それが自然本性的に与えられている限りにおいて、「魂の内に本来的善が残っているとする見方と非常によく適合する」ものであり、従ってまた、魂に固有の善の根拠としての神を特別な議論なしに証示する護教論的に有用な概念装置として機能する<sup>31</sup>。

だが次の点にも留意すべきであろう。ストア派にあっては、共通観念は、具体的な場面での善悪の判断、さらに言えばストア的な善き生へと結びつくものであった。それに対し、筆者の管見の限りでは、テルトゥリアヌスの内にこうした共通観念が有するストア的含意についての言及は見られなかった。実際、彼にとって、共通観念によって知られるこの神は「善なる神」であり「裁き手である神」に他ならないのであり、神それ自体の内に善悪の究極的な基準が求められる。そして(a')人間と神との間に根本的な相違がある限り、我々自身がこの善悪の基準を全体として所有しているとは言えないであろう。それ故本稿は、両者の体系が拠って立つ基本的前提の相違が、共通観念という概念装置の倫理の領域への直接的な拡大を制限するものと推測する<sup>32</sup>。

## 7 アウグスティヌスにおける意義

それではアウグスティヌスの用いる“communes notitiae”の語は、ストア派の“κοινὰ ἐνοτία”に対していかなる関係にあるのだろうか。

端的に言って、両者の間に明確な関係を見出すことは困難であるように思われる。実際、ストア派の共通観念の本質的な特徴であり、テルトゥリアヌスがそれを護教論的に有益であると看做した、(1)非人為的に、即ち自然的に形成される、という点さえもアウグスティヌスの「共通観念」の語に見出すことは出来ない。なぜなら、先の引用箇所から明らかなように、彼にあって「共通」という形容詞は、各人に共通するという意味においてではなく、「小さきものと大なるもの」との間の共通性について言われているのであり、これは人間が知的探求によって「見出す *uidere*」ものである。(4)善悪の判断に供するものでもなければ、テルトゥリアヌスの言う様に(2)神の存在を確信されるものでもない。むしろ、それを見出すことは、神への呼びかけを通して、その助力によって初めて可能になるのであり、ここでは既に我々が何らかの仕方神を知っていることが前提とされている。

アウグスティヌスの共通観念の語が独自性を有していることは、ストア派に対する彼の次のような批判からも理解されよう。

[論理学という哲学の]第二部分が取り扱われている教説に関する限り、彼ら[新プラトン派の人々]は、真理判断 *iudicium veritatis* の基準を身体的感覚に置いたり、学ばれる一切の事柄はそうした信頼出来ない欺瞞の基準によって判断されるべきであると考えたりする者達と比較されるべきであるとは思われない。そうした者達とはエピクロス派およびそれに類したあらゆる他の哲学者達のことであり、



ストア派の人々さえも例外ではない。彼らは、彼らが弁証論と名づけているところの討論の巧みな術を熱愛したが、結局はそれは身体的感覚から導き出されるべきだと考えていた。そして彼らは、そうした感覚から、彼らが「エンノイアイ ἐννοιαί」と呼んでいる諸事物の観念 *notiones*——それを彼らは定義によって説明する——を孕むのだと主張し、また、そうした感覚から全ての学習と教育の理論が発展させられ結合されると主張した。ここで私がいつも大いに不思議に思っているのは彼らが知恵のみが美であると言う時、どんな身体的感覚によってそうした美を見るのかということであり、どんな肉の目をもって知恵の形相 *forma* と優美さを認識するのかということである。<sup>33</sup>

ここでアウグスティヌスは、ストア派の問題点を、その学問の体系が身体的感覚に基礎を置くものであり、定義によって説明される諸観念もまた、身体的感覚に起因すると彼らが主張したことの内に見ている。ここでは明らかに、存在するものは全て物体である、というストア派の公理が問題とされている。なぜなら彼らは「精神 *mens* によって認識されるもの」と「感覚によって認識されるもの」とを区別していないからである<sup>34</sup>。新プラトン主義の書物によって「非物体的な真理の探求へ促され」たアウグスティヌスにとって<sup>35</sup>、こうした批判は当然のものであると言えよう。

しかしまた、我々にとってより重要な点は、彼がそうしたストア派の物質主義をして、真理判断の基準を身体的感覚に置いていると看做している点である。なぜなら、観念が身体的感覚に由来するとか、身体的感覚から教育の理論が展開されるということから、ストア派の人々さえもが「真理判断の基準を身体的感覚に置いたり、学ばれる一切の事柄はそうした信頼出来ない欺瞞的基準によって判断される」と考えているという批判を直接に引き出すことは困難であり、このアウグスティヌスの批判はストア派の共通観念に対する一定の知見を必要としているように思われるからである。

既述の様に、ストア派にとって共通観念（あるいは先取観念）は、確かに善悪の判断基準とされ、彼らの公理に従えば、物体的事物に関わる諸事象の観察によって自然的に人間のロゴスを満たすものである。然るにまた、ゴルトシュミットの分析から明らかのように、学知はこの共通観念の定義による説明を通して展開される。それ故、共通観念が可感的事物、即ち物体の感覚を通して形成されるとする時、彼らは共通感覚という身体的感覚に由来する基準を以って、「学ばれる一切の事柄」を判断していると言えよう。

ストア派の共通観念に対するこのような理解を経て初めて、我々はストア派が「真理の基準を身体的な感覚に置いている」というアウグスティヌスの批判を理解することが出来る。そしてアウグスティヌスは、このようなストア的基準を欺瞞的であると退けた上で、上記引用箇所直後で新プラトン派の人々を、彼らが「万物を創造したのと同じ神そのものが、全てのものを学ぶ為の精神の光であると言っている」と主張しているとして、ストア派よりも上位に位置づけるのである<sup>36</sup>。

この拒絶から我々は、第一に、アウグスティヌスがストア派の「観念」に関わる教説に、その「共通観念」という概念装置をも含め十分に通じていたこと、第二に、ストア的「共通観念」の排斥の理由が、単に彼らの物質主義に対する拒絶ではなく、こ

の概念装置が持つ次の含意に対する拒絶をも含んでいることの二点を知ることが出来る。即ち、彼は「すべてのものを学ぶ為」には神という「精神の光」が必要とされるとして、人間の自然本性を超越していく射程を確保する為に、(b)人間のロゴスが自己の自然本性に一致して働き得る、という共通観念に関わるストア派の前提を退けるのである。

それでは『告白』11巻23章における「共通観念」の語は一体いかなる意義を有しているのだろうか。アウグスティヌスの文脈に則してそれを理解する為には、『告白』という著作がそれへと捧げられているところの神と、11巻の該当箇所でも問題とされる時間についての探究という二つの観点を欠くことは出来ないであろう。なぜなら彼にとり「共通観念」とは、まず何よりも「小さきものと大いなるものとに」共通する観念として立てられているからである。時間という謎は、『告白』という著作全体がそれへと捧げられている神に比べれば「小さきもの」に過ぎないが<sup>37</sup>、にもかかわらず、これらの小さき事柄の内には大いなる事柄に「共通する」諸観念が存する。従って彼は、この謎の一層の探求を欲し、それを可能ならしめるよう神に乞い願うのである。それ故、ここで「共通観念」の語は、神の助力をその可能根拠としながら、人間の知的営為を価値付け、方向付けるものとして用いられていると理解出来る。

## 8 結語

以上の議論から、本稿は次の結論に達する。

『告白』11巻23章における「共通観念」という、一見「ストア的」に見える用語は、直接ストア派のそれへと帰されるべきではない。なぜなら、両者の間には拠って立つ知的基盤の相違があるからであり、特にアウグスティヌスにあっては、ストア派の物質主義に対するものとして新プラトン主義の影響を常に考慮に入れなければならない。実際、彼はテルトゥリアヌスを、魂をも物体と看做すとして非難している<sup>38</sup>。

しかしながら一方で、上述のストア派の「観念」に対するアウグスティヌスの拒絶は、彼がストア派の議論に、その哲学的体系が持つ含意まで含めて、良く通じていたことの証であり、その批判的姿勢を通じストア哲学が彼の哲学体系の発展・形成に何らかの影響を与えた可能性を示している。本稿はここまでの議論から、少なくともストア派の「共通観念」についてアウグスティヌスが十分な知見を有していたと考える。

但し、このことが彼の哲学的体系に実際にどのような影響を与えたかを論じる為には、ストア派の共通観念が含意する倫理的意義を踏まえた一層の考察が必要となろう。この点については稿を改めて論じるとし、以上の分析をもって本稿の成果としたい。

### 【付記】

本文および註における主要なテキストの引用は以下の略号を以て示す。訳文に関しては併記した邦訳を参照し、適宜改変を加えた。

SVF: J. von Arnim ed., *Stoicorum Veterum Fragmenta*, 3 vol., Lipsiae, 1903-5 (『初期ストア派断片集』京都

- 大学学術出版会、1-5 巻、中川純男他訳、2000-2006)
- DL : H. S. Long ed., *Diogenis Laertii Vitae Philosophorum*, 2 vol., OCT, 1964 (『ギリシア哲学者列伝』上中下、加来彰俊訳、岩波文庫、1984-94)
- Aug., *Conf. : BA 13-14, Œuvres de saint Augustin, Les confessions*, texte de l'édition de M. Skutella, intr. et notes A. Solignac, trad. E. Tréhorel et G. Bouissou, Declée, Paris, 1962 (『アウグスティヌス』世界の名著 14、山田晶訳、中央公論社、1968、アウグスティヌス『告白』上下、服部栄次郎訳、岩波文庫、改訳版 1976、『告白録』アウグスティヌス著作集 5/1-2、宮谷宣史訳、教文館、1993-2007)
- , *De civ. Dei : BA 34, La Cité de Dieu, t. II. Livres VI-X*, texte de la 4ème éd. de B. Dombart et A. Kalb, intr. et notes G. Bardy, trad. G. Combès, Declée, Paris, 1959 (『神の国』アウグスティヌス著作集 12、茂泉昭男、野町啓訳、教文館、1982)
- , *De gen. ad lit. : BA 49, La Genèse au sens littéral*, intr. trad. et notes P. Agaësse et A. Solignac, Declée, Paris, 1972 (『創世記注解 1-2』アウグスティヌス著作集 16-17 片柳栄一訳、教文館、1994-1999)
- Ter., *De anima : Q. S. Fl. Tertulliani De Anima*, ed., intr. and com. J. H. Waszink, Meulenhoff, Amsterdam, 1947.
- , *De tes. animae : CCL, Tertulliani Opera, pars I, Opera catholica; IV, De testimonio animae*, cura et studio R. Willems, 1954
- , *De resurr. : CCL, Tertulliani Opera, pars II, Opera Montanistica; XIX, De resurrectione mortuorum*, cura et studio J. G. Ph. Borleffs, 1954.
- , *Ad Scap. : CCL, Tertulliani Opera, pars II, Opera Montanistica; XXIV, Ad Scapulam*, cura et studio E. Dekkers, 1954.

### 【註】

<sup>1</sup> 古典的研究として、G Verbeke, “Augustin et le stoicism” (*Rech. Aug.* 1, 1958, pp. 67-89)がある。アウグスティヌスが『三位一体論』において神の三一的構造の分析に、ストア派の「関係性」を巡る議論の表現形式を流用しているという興味深い指摘については神崎繁「生存の技法としての「自己感知」」(『思想』972, 2005, pp. 87-89)を参照。

<sup>2</sup> Gerard J. P. O'Daly, “Augustine on the Measurement of Time —Some Comparisons with Aristotelian and Stoic Texts,” in *Neoplatonism and Early Christian Thought*, ed. H. J. Blumenthal and R. A. Markus, Variorum Publications, London, 1981.

<sup>3</sup> アウグスティヌスは自らのマニ教徒時代を回顧し、存在するものは全て物体であり、神さえもそのように看做していたとを告白する (Aug., *Conf.*, 4, 16, 31)。彼のマニ教からキリスト教への回心が、こうした物質主義的世界観の克服の上に立っていることについては、片柳栄一『初期アウグスティヌス哲学の形成』(創文社、1995) 225-226 頁を参照。またストア派にとって非物体的な存在 *ὑπάρχειν* していないが、存立 *ὑφίστασθαι* している。ストア派における非物体的なものの意義については、E. プレイエ『初期ストア哲学における非物体的なものの理論』(江川隆男訳、月曜社、2006)を参照。

<sup>4</sup> E. g. Aug., *De gen. ad lit.*, 10, 25-26.

<sup>5</sup> 本稿ではこの語によって、アルニムの労作『初期ストア派断片集』によって知られる、いわゆる初期ストア派の哲学を指す。

<sup>6</sup> 『告白』の時間論を11巻14-28章の範囲に限定することはフッサールに遡るものであるが、筆者は必ずしもこの範囲指定に賛同するものではない。

<sup>7</sup> この人物が誰であるか、様々な説が提出されており、その一つに時間を「宇宙の動の間隔」であると定義したクリュシッポス (Simplicius, *Aristot. categ.*, 350 = SVF 2, 510) にまで遡るとする説がある (BA

14, p. 586)。またシンプリキオスは「ある人々は……ストア派のある人々が言っていたように、[時間]が宇宙の天球そのものであると主張」する、という証言を残している (Simplicius, *Aristot. phys.*, 700 = *SVF*, 2, 516)。オドネルは、諸説を踏まえた上で、教養あるアウグスティヌスの同時代人で直接彼と面識があった人物ではないかと推測しているが、筆者もまたこの見解を採りたい。

<sup>8</sup> Aug., Conf., 11, 23, 29.

<sup>9</sup> Ibid., 30.

<sup>10</sup> Ibid., 30.

<sup>11</sup> Aug., Conf., 11, 6, 8. ストア派もまた言葉を物体と看做した (DL 7, 55 = *SVF*, 3, Diog. 18)。

<sup>12</sup> O'Daly, op. cit., p. 175.

<sup>13</sup> Aug., Conf., 11, 24, 31.

<sup>14</sup> BA14, p. 319 n. 2.

<sup>15</sup> Augustine, *Confessions; t.3; commentary on Books 8-13*, J. J. O'Donnell, Clarendon Press, Oxford, 1992, p. 287.

<sup>16</sup> *Q. S. Fl. Tertulliani De anima*, ed., intr. and com. J. H. Waszink, Meulenhoff, Amsterdam, 1947, pp. 454-455.

<sup>17</sup> Ter., *De anima*, 41, 2.

<sup>18</sup> Ter., *De anima*, 41, 3: なおこの一節に関してヴァスツィンクは、それがラテン語の格言的な言い回しに由来するものであって (cf. Varro, *Lex Maenia*, 9)、その後文がテルトゥリアヌスの悲観主義的人間観を示すとする解釈を退けている (Waszink, op. cit., p. 454)。

<sup>19</sup> ここで *communes sensus* (単数形 *communis sensus*) の語は何らかの知覚作用をではなく、知覚した結果としての観念を指すと考えられる。従って「共通感覚」ではなく、以下で論じるストア派との対応関係をも考慮した上で、「共通観念」の訳語を用いる。

<sup>20</sup> Waszink, op. cit., p. 454.

<sup>21</sup> ジャン・ブラン『ストア哲学』文庫クセジュ、有田潤訳、白水社、1973 (1959)、10 頁; Jean Brun, *Le Stoïcisme*, collection "Que Sais-Je?" N° 770, P.U.F., Paris, 1958, p. 6.

<sup>22</sup> Plutarchus., *De Stoic. repugn.*, 17, 1041E = *SVF*, 3, 69.

<sup>23</sup> ブランはまた、共通観念が「感覚的な表象から、かつ自然的な推論によって生まれる」としている (ブラン、上掲書、59 頁; Jean Brun, op. cit., pp. 64-65)。感覚的表象は観念の原因であって、観念それ自体は感覚的表象から区別される (Victor Goldschmidt, *Le système Stoïcien et l'idée de Temps*, J. Vrin, Paris, 3<sup>ème</sup> éd., 1977, p. 160 n. 1)。

<sup>24</sup> DL 7, 55. また、この 14 歳というのは、魂において「種子的ロゴス *spermatikos logos*」、即ちこの場合「生殖原理」、がその能力を獲得する時でもある (Cf. DL 7, 148 = *SVF*, 2, 1132)。

<sup>25</sup> A. A. Long, *Stoic Studies*, Cambridge Univ. press, New York, reprint. 1999(1996), p. 134.

<sup>26</sup> Cf. Long, op. cit., p. 134, 142.

<sup>27</sup> Long, op. cit., pp. 148-150.

<sup>28</sup> Long, op. cit., pp. 141.

<sup>29</sup> Cf. Aug., *De civ. Dei*, 8, 7.

<sup>30</sup> Goldschmidt, op. cit., pp. 160-162.

<sup>31</sup> Waszink, op. cit., pp. 454-455; ヴァスツィンクは事実そうした判断が有効であった証左として、後のラテン世界の護教家達にも同様の考えが継承されていることを挙げている。

<sup>32</sup> 言及の不在と並んで、テルトゥリアヌスが共通観念という概念装置を、善き生との関連からではなく、むしろそれを志す為の一つの契機として用いていることは (cf. Ter., *De tes. animae*, 2, 2; 5, 1-3)、こ

---

うした推測の妥当性を示すものであるように思われる。

<sup>33</sup> Aug., *De civ. Dei*, 8, 7.

<sup>34</sup> Ibid.

<sup>35</sup> Aug., *Conf.*, 7, 20, 26.

<sup>36</sup> Aug., *De civ. Dei*, 8, 7.

<sup>37</sup> 『告白』のいわゆる「時間論」は、直接的には、キリスト教の創造論を批判し、「神は創造以前に何を為していたのか」という異論を投げかける人々に答える為になされている (Aug., *Conf.*, 11, 10, 12)。

<sup>38</sup> Aug., *De gen. ad lit.*, loc. cit.

(やまだ・しょうたろう 筑波大学人文社会科学研究科 哲学・思想専攻)